

「お嬢様、お食事をお持ちしました」

そう言って私の昼食を運んできたのは岳(がく)という名の執事だ。

26歳、186センチという長身に鍛えられた体。

私の体は彼の考えるメニューで作られている。

彼がテーブルに食事を並べていると今度はまた一人、海翔(かいと)という名の執事が数着の服を抱えて入ってきた。

29歳、長い髪を後ろで結び、細身で、スーツのよく似合う人だ。

「お嬢様、週末のお食事会のお洋服ですが、こちらのどれかでいかがでしょう？」

彼のセンスを私はいつも信頼している。

私が片方を指差すと海翔は「こちらですね」と軽くそれを掲げ、そのまま部屋を出ていった。

私が食事に手をつけ始めた頃に入ってきたのは洸一(こういち)だ。

「お嬢様、来週のスケジュールが出揃いました。ご確認をお願いいたします」

39歳の彼はもともと父の付き人だった。

父のそばで数年働き、どういうわけか今は私の執事になっている。

長くこの家で働いていることもあって父からの信頼も厚く、父はときどき私のことを洸一に聞いているらしい。

「ああ……また来週はこの人と食事かあ。この人ってゴシップ好きすぎて話合わせるのが大変なんだよね」

私は洸一の手の中のタブレットを見ながらおしゃれなドレッシングをかぶったサラダを口に運んだ。

憂鬱な予定を慰めるような美味しさが体に沁みていく。

——私の父は「金持ち」だ。

祖父もそうだ。

何をしている人なのか正直よく分からない。昔からそうだった。

物心ついたときには私は大きな家に住んでいて、何人かの執事が私の世話をしていた。

執事、というと大袈裟だけど実際のところは世話係みたいなものだ。

それが高校生になると歳の近い執事と入れ替わり、そこでついたのが岳と海翔だ。

それと同時期に父についていた洸一も私の担当になった。

食事の管理をしてくれる岳。

服や身だしなみを整えてくれる海翔。

予定と対外的なことを取り仕切る洸一。

私は働かなくても生きていけるし、このご時世らしく父から結婚の話を振られることもない。

毎日好きなことをして過ごして、たまに人間関係を保つために食事会に出て。

思い出したように資産の管理をして。

それだけの、何も起きない日々。

恵まれているんだと思う。  
たぶん。誰がどう見ても。

…でも、だからといって退屈じゃないわけじゃないのだ。

三人の執事も出て行って部屋に一人になった昼下がり。

「今日はもうやることないよね〜♡」

私の手はベッドの横のチェストに手を伸ばした。

一番上の引き出しから取り出したのは、電マとピンク色のローターのついたクリップ。

「サクッとやっちゃおっと♡♡♡♡」

私は一人になるといつも、この退屈を紛らわすためにオナニーをしてしまう♡♡♡

——ヴヴヴヴッ♡♡♡ ヴヴヴヴヴッ！♡♡♡

「んおッ♡ お♡♡ お” ッ、きく♡♡♡ クリのとっぺん♡♡♡♡ 電マでビチビチ叩かれるの♡♡♡ きく……！♡♡♡♡♡」

ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡  
♡

「お、お”♡♡♡ ッッ、ほ、お♡♡ ちくび♡♡♡♡ 痺れりゅ♡♡ きもちっ♡♡ これきもちい” いい♡♡♡♡♡♡♡♡」

広いベッドで素っ裸で寝転がり、M字に曲げた膝を限界まで開く♡♡

筋が浮くほどそうするとその中心のクリトリスが敏感になることを知っているから♡♡♡♡♡

そのクリトリスに掠るくらいの位置で電マを当て、乳首は根元をしっかりとクリップで挟んで私は仰け反った♡♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡♡ ヴヴヴヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡♡

ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡  
♡

「あッ♡♡♡ あ~~~~~っ♡♡♡♡  
イクッ！♡♡ これ♡♡ イクイクイクイク……！！♡  
♡♡♡♡♡」

ビクビク、……♡♡♡♡♡♡

肩を浮かせ体を丸めて私はいった♡  
それでも電マも乳首クリップも止めない♡♡♡  
イってる最中の過敏になり続けるクリトリスも乳首も  
ひたすら責め続ける♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡♡ ヴヴヴヴヴヴヴ  
ヴヴッ♡♡♡♡  
ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡♡ ヴヴッ♡  
♡

「お♡♡ むり♡♡ むり♡♡♡ イってるのに♡♡  
ずっとイクのむりっ♡♡♡♡♡♡ おっ、んおっ♡♡♡  
きもち、……！！♡♡♡♡♡」

絶頂で噴き出た汗をだらだらと肌に伝わせながら私は

お腹を凹ませ背中もお尻も浮かせた♡♡♡

体は受け止めきれない快感に震えている♡♡♡♡♡

——そこで、ドアがノックされた♡

「お嬢様、」

ドアの向こうから籠った声♡

岳の声だ♡

私は手を止めず返事した♡

「お、お♡♡♡ な、なに♡♡ はいってきていいよお♡  
♡♡♡」

「海翔と洸一さんもいますかいいですか？」

「いい♡♡♡ いい、……っ♡♡♡♡ お、お♡♡お♡♡  
♡ やば、♡♡♡」

開いたドア♡

三人が入ってきて、それと同時に私はまた、

「イ`く` ……！！！！♡♡♡♡♡ ツツ、うううう  
ううう！！！！♡♡♡♡♡」

体を丸めて絶頂した♡♡

それでもまだやめない♡♡♡

三人がベッドの横にやってきても私の両手は電マを握り  
乳首は細かく振動するクリップに挟まれたまま♡♡♡  
♡♡

「ほ♡♡♡んお♡♡♡お”ッ！♡♡お”おおお！♡♡  
♡♡♡」

「紅茶とお茶菓子をお持ちしました」

「お嬢様、来週のネイルサロンのデザインなのですがこちらで予約してよろしいですか？」

「お嬢様が先ほど懸念していらしたお食事会ですが人数の変更がありまして…」

「お♡♡お”ッ♡♡♡♡わか、った♡♡ぜんぶまかせ  
る♡♡♡♡♡さんにんのすきなように♡♡して……♡  
♡♡♡♡ ……ん”お、お…っっ、またイク！♡♡♡♡  
イク”うううう！！♡♡♡♡♡♡」

ガクガクガク……♡♡♡♡♡♡

Mだった足がその形を保てなくなり天井へ向く♡♡♡  
♡♡

自分の意識の全てがクリトリスと乳首の三つの突起に集中し、脳みそまで震わせるほどの絶頂感に、私はその

まま気を失った♡♡♡♡

「あー…、もしかして気絶してます？これ」

「そのようですね、電マのスイッチも切らずに…」

「白目剥いてイってましたもんねえ」

ベッドを覗く三人は呆れ顔だ♡

意識のない私はもちろんそんなこと知らない♡

汗だくで今にも涎を垂らしそうな呆けた顔をして、ヒクヒクとクリトリスを痙攣させる私を見て、彼らが股間を膨らませていることなんて知らない♡

「全く、こっちの気も知らないで」

「俺たちに見られてもオナニーしまくってるなんて、甘やかしすぎましたかね？」

「でもこの天真爛漫なのがお嬢様のいいところですから。とりあえず処理しましょうか…、海翔、タオル持ってきてくれますか」

洸一がそう言って、海翔はドアへと向かった♡

しかしその海翔の腕を掴んで止めたのは岳だった♡

「あの……、少しだけ、触っちゃだめですか？」

「……」

「……が、岳」

「ほら、二人だってもう我慢できないじゃないですか！  
オナニーしてるお嬢様見てちんぽデカくしてるくせに  
！」

洸一も海翔も言葉が紡げない♡

少しの沈黙が流れたあと、動いたのは岳だ♡

岳は私の開いたままの足の間を覗き込むと嬉しそうに  
溜め息を吐いた♡♡♡

「お嬢様のおまんこぐっちょぐちょ…♡♡♡ クリなん  
てまだヒクついてるし♡♡ ここ、おもちゃしか知らな  
いんでしょう？俺たちで気持ち良くして差し上げましょ  
うよ」

「岳、待てって……」

「……」

伸びてくる岳の大きな手♡

その手は太ももを滑り足の付け根を撫で、土手の部分  
をふわふわとくすぐるとゆっくりとクリトリスの上側を  
押さえつけクリトリスを露出させた♡♡

「お嬢様のクリつるつるだ♡ かわいい…♡♡ 電マばっ

かり使っているとそれでしかイけなくなっちゃいますよー  
…♡♡♡♡」

そして親指で濡れたクリトリスを♡♡

ふに♡♡♡

押して♡♡

ふに♡♡ふに♡♡

押して♡押して♡♡

なでなで♡♡ くるくる…♡♡

撫で回す♡♡♡

「はは、お嬢様♡ 足もクリもピクピクしてる♡♡ 寝て  
ても感じてくれてるんですか？♡ほんとスケベなお嬢  
様だなあ♡♡♡」

太ももから足先にかけてのしかかっている岳の大きな  
体はまるで足を押さえつけているようだった♡

私のクリトリスが岳の指から逃げられないように♡♡  
♡

ふに♡♡ なで♡♡ くるくる、くるくる…♡♡♡♡

岳は私の微かな反応を楽しむようにそれをひたすらに

続けた♡♡

「こ、洸一さん、俺も我慢できないです…」

「海翔…」

海翔は岳とは反対側、枕元へ回ると私の頭を撫で、髪を撫で、それからその手は頬を滑り鎖骨を通り越して両胸を包んだ♡♡

細い男性の手がふわりと覆って、乳首を指の間で優しく挟む♡♡

「二人とも、こんな…」

「洸一さんだってお嬢様のことが好きで…それでお嬢様の担当に変えてもらったんでしょう？お嬢様のこと触りたいんじゃないんですか？」

……え？

そうなの？

そんなの初耳なんだけど？

途中から起きていた私♡

初めて聞いた洸一の話に思わず目を開けそうになって

いた♡

でもまだ我慢♡ このまま寝たふりしていれば三人が触ってくれるかもしれないんだから♡♡

「ほらあ、洗一さんもこのつるつるでぷくぷくのクリトリス触りたいでしょう？」

「ちょっと圧迫しただけでビンビンに勃っちゃう乳首も…。しゃぶりつきたいですね？」

ふに♡♡ ふに、ふに♡♡ くるくるくる♡♡♡

クリトリスを押され、撫で回され♡♡♡

きゅ♡♡きゅ～……♡♡♡

乳首の付け根を指で絶妙な強さで挟まれ…♡♡

「んあ……♡♡♡♡♡」

私は思わずため息を吐いた♡♡

それにぐくりと、すぐ近くで洗一が唾を飲み込んだ音がした♡♡

「そうですね、もう我慢しなくていいか。ずっと立ち場を言い訳にしてきましたけど」

ベッドが沈んだ♡

洸一もベッドに乗り上がってきたらしい♡♡♡

「私もお嬢様の胸、触りたいです」

すぐ近くで洸一の声がすると、片方の胸から細い海翔の手が離れて、その代わりに年相応の節くれだった洸一の手が触れた♡♡

その手は慈しむように胸の曲線に沿わされて、それから♡♡

すり♡♡

「んっ♡♡」

指が乳首を押し倒す♡♡♡

その指は何度も往復し始めた♡♡

すり♡♡ すり♡♡ すり…♡♡

「っ♡♡ ん♡♡ う♡♡♡」

洸一の乾いた指が乳首の幹を擦って、上へ下へ、右へ左へと乳首を倒す♡♡♡

「こっちの乳首もしてあげましょうね♡」

海翔の声がして、そちらの乳首は、

ふに♡♡

根元を挟まれ♡♡♡

ふに♡♡ ふに♡♡ きゅ…♡♡♡

やわく挟んでときどき搾った♡♡♡

広いベッドに仰向けに転がった私に三人が群がって、  
一人はクリトリスを、二人は乳首を、それぞれ刺激して  
くる♡♡♡

彼らは私の執事だ♡♡

私は今、自分の執事たちに体を触られている……♡♡

変わり映えしない日常が変わる音がして私の心臓が大  
きく鳴り始めた♡♡♡

「電マオナニーのせいかな、お嬢様のクリ肥大化してる♡♡ これじゃクリちんぽだ♡♡♡」

岳の声がして、

……ぢゅ、♡♡♡

クリトリスにしゃぶりつかれた♡♡

「ひあんっ♡♡♡♡」

クリトリスが柔らかい粘膜に包まれた衝撃で私は腰を浮かせてしまった♡♡

「お嬢様起きてる？」

「どうでしょうね」

「もうどうせ止められないんだから、このまましゃぶっちゃお♡♡」

ぢゅっ♡♡ ぢゅる、ぢゅっ♡♡

クリトリスを包む唇が♡♡

ぢゅぶ♡♡ ぢゅっ、ちゅう♡♡

窄められて♡♡

ぢゅ♡♡ ぢゅ♡♡ ぢゅ♡♡

圧迫してくる♡♡♡

「んッ♡♡ あ、あ♡ うあ♡ あ♡♡」

「お嬢様の腰、くねくねしちゃってる…」

「いつの間にかこんなに体つきも艶かしくなられて…。  
乳首もオナニーでいじりすぎですかねえ、誘うみたいに  
ピンと尖って大きくなって」

そこで両乳首も♡♡

湿った温かいものに覆い被された♡♡♡

ぢゅ♡♡ ちゅ♡♡

乳首の先だけを吸われたかと思えば♡

ぢゅ………っ♡♡♡♡♡

乳輪ごと食まれ吸い上げられて♡♡♡

ぢゅ〜〜〜〜〜……♡♡♡♡

更に伸ばすように上へ引っ張り上げられる♡♡♡

「……ッあ” ♡♡ ああああっ♡♡♡♡♡」

頭を振ってあられもない声をあげる私♡♡

三人はそのままそれぞれの突起を思うがままに刺激した♡♡

ぢゅッ♡♡ ぢゅ、れるっ♡♡ れるっ♡♡ れるっ♡♡  
岳に吸われたクリトリスは口内で舌先で弾かれ♡♡♡  
ぢゅ…ぷっ♡♡♡ ぢゅぷ、ぢゅぷっ♡♡ ぢゅ、ぢゅ、  
ぢゅ♡♡♡

海翔に吸われた乳首は付け根を圧迫したまま上下に伸ばされ♡

ぢゅ、ろっ♡♡ ぢゅる♡♡ ぢゅるう…♡♡♡ ぢゅる、  
る、る、る♡♡♡

洸一に吸われた乳首は根元から先端まで濡れた唇が往復する♡♡♡

(なにこれ♡♡♡♡ き、きもち〜〜〜〜♡♡♡♡♡ 自分の意思で動かすおもちゃじゃない、人にされるの気持ちよすぎる！♡♡ しかもクリも乳首もぜんぶ一緒に……♡♡♡♡♡)

刺激される三つの突起から、チリチリ♡、ぞくぞく♡、体に気持ちいい感覚が広がっていく♡♡♡

「ふあ♡♡ あゝッ♡♡ ア♡♡…んゝ ああっ♡♡♡」

その感覚を余すことなく味わおうと体が硬直していった♡♡

そして全身に沁み渡ると♡♡♡

「…………、ッ” ッ” ♡♡♡♡♡ あ、あ♡♡♡♡ だ、め  
…………♡♡♡♡♡ イく…ッ♡♡♡♡♡ イく、イク……  
♡♡♡♡♡ ん” お” 、お、お、お、お…………！♡♡♡  
♡♡♡」

私はクリトリスも乳首も、三人に押し付けるように体  
をのけぞらせていった♡♡♡♡♡

いった体から力が抜けていく♡♡  
その余韻を楽しんでいたのに♡♡♡

「ほ、オ…！！♡♡♡♡♡」

ぢゅッ！♡♡♡ぢゅッ、ぢゅうっ♡♡ぢゅぶぶぶッ♡  
♡♡ぢゅぶぶぶッ！♡♡♡♡

べる、べるべるべるべるるっ♡♡♡べるべるべる  
べる、れるれるれるれるる……♡♡♡♡♡

ぢゅっっぽ♡♡♡ぢゅっっぽ♡♡♡ぢゅっっぽ♡♡♡  
ぢゅ……、っっぽ！♡♡♡♡♡

三人は刺激する唇を止めなかった♡♡♡♡

いつものオナニーなら自分で加減して浅いところで留めておける、でも人にやられるのはわけが違う♡♡♡♡

イって敏感になったところを手加減なく責められる♡♡♡

私は思わず体を起こした♡

「お、起きてる、起きてるから…！」

「知っていますよ」

「俺たちがお嬢様の狸寝入りに気付かないわけないでしょう♡♡」

「寝たふりしてくださっていたということは、受け入れてくださるんですよね？♡♡♡」

ぢゅう〜〜〜〜〜ッッッッ！！♡♡♡♡♡

「っっ、おほ……、ッッッ♡♡♡♡♡ お”ッ♡♡♡ や、ば♡♡♡」

私の返事も待たず今度は思いっきり吸い上げられる突起♡♡♡

痛くない、気持ちいいギリギリの強さで搾られている♡♡♡♡

伸ばされた薄い皮膚はトクトクと脈打って、唇のしわ  
まで感じ取ってしまうほど敏感だ♡♡♡♡

ぢゅう〜〜〜〜〜ッッ♡♡♡♡♡

「ひ♡♡ お♡♡♡ ン♡ お♡♡♡♡ ほ♡♡♡♡♡」

ぢゅうううう、ぢゅううううう……………！♡♡♡♡  
♡

「…オ、ん♡♡ んふ♡♡ ん……………、っ♡♡♡♡  
♡」

ぢゅ……………、ぢゅ……………！！♡♡♡♡♡ ぢゅ……………！  
！♡♡♡♡♡

「お、お〜〜〜……………っ♡♡♡♡ しゅ、ご♡♡  
♡ ちくびも♡クリも♡ じんじんして、……………♡♡♡♡  
きもち、きもち♡♡♡♡」

また、体が突っ張っていく♡♡♡♡

私は額から胸元から腕から足から、汗を伝えながら  
手足を小さく震わせた♡♡♡♡

「イ く♡♡ イっちゃうのお♡♡♡ またイっちゃう、  
からあ♡♡♡♡ ……………お♡♡♡ お”、お”、お、イク、  
……………ン” んんんん”、……！！♡♡♡♡♡♡  
♡♡」

大きく体が揺れた♡♡

立て続けにイかされ私は胸を激しく上下させ必死に呼吸することしかできない♡

けれど私から離れた三人はすぐに、さっきまで私が使っていたおもちゃを手にとった♡♡

「お嬢様は最近がお気に入りですよね♡♡」  
「これ使えば何度でもイっちゃえるんでしょう？♡♡  
♡」  
「…、だめ、だめ…！ 今は、」

ぱち、きゅ、

勃起したままの両乳首を挟む、半透明のピンク色のクリップ♡♡

先には小さいモーターがついていてその絶妙な重さが  
乳首を引っ張る♡♡

「あ、は……っ♡♡♡♡♡」

挟まれただけで体が跳ね上がった♡♡♡♡

岳と海翔が両側からそのモーター部分についているス  
イッチに手を伸ばし♡♡

カチッ♡

と動かした♡♡

ブブブブブブブブ……♡♡♡♡♡

「ン おおおお……！！♡♡♡♡♡」

小ぶりのモーターらしい小さな振動音♡♡

それでも敏感に育った乳首には大きな刺激になって♡  
♡♡

私はベッドの上で体が跳ねさせた♡♡

「お嬢様、こっちが本命じゃないのですか？」

「あ、あ…っ、でんま♡♡ らめっ♡♡♡ いまそれした

ら、」

さっきまで岳がしゃぶって皮から露出してしまったクリトリス♡♡

そこに洗一が電マを近付ける♡♡♡

寸前でスイッチを入れられたそれは、

ヴヴヴヴヴヴ……ッ♡♡♡♡♡

乳首クリップの音が聞こえなくなるくらい大きな音を鳴らし♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「お” ……………ッッッ！！♡♡♡♡♡♡」

私のクリトリスを激しく細かく叩いた♡♡♡♡♡

その瞬間、体に電気が走ったように足が伸びて♡♡♡♡♡♡

「イ”、……………！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

私はまたいった♡♡♡♡♡

制御できない絶頂に体がのたうち回る♡♡

その体は三人に押さえ込まれ、休むことなくおもちゃの振動を与えられた♡♡♡♡♡

普段自分でしてるのと違う、強烈な追撃に頭がパニックになる♡♡♡♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッッッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッッッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「ふお、おおおおお！！♡♡♡♡♡ らめえ…！！♡♡♡♡♡ ちゅよい、でんま……、お`、ん` お、お……！！♡♡♡♡♡ やめ、♡♡♡ ゾ` お、おおお……！！♡♡♡ うそ、またイク、いく！！！！♡♡♡♡♡ おおおおおおおお！！！！♡♡♡♡♡♡♡」

「……、お嬢様、えろすぎ」

「この顔たまんないなー…」

「絶頂するときに白目剥くの、癖になってますね。こんなみっともないお顔、他で晒してはいけませんよ」

「……っ”っ”！！♡♡♡♡♡ ま、っへ、……え”！  
♡♡♡♡♡ も、…すと、っぶ♡♡♡♡♡ くり、こわれ  
♡♡え、へ、……♡♡♡♡♡ お、……お？、お、お  
♡♡♡ お♡♡ お”♡♡♡ またいくっ、いきそ、」

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッッッ！！♡♡♡♡♡♡  
♡♡

…ヴ——————ッッッ！！♡♡♡♡♡  
♡♡♡

ヴ——————ッッッ！！♡♡♡♡♡♡  
♡♡

また振動が強くなった♡♡♡

視界が霞む♡♡♡♡

洸一の言うように痙攣する瞼の中でぐるりと視界が上  
向いた♡♡♡

その瞬間に見えた三人の顔が♡♡♡♡

とんでもなくオスの顔をしていて♡♡♡♡♡

私のお腹の奥がぎゅう♡♡♡と縮こまるのが分かった  
♡♡♡♡

「イクっ、♡♡♡♡♡ おッ” ほおおおおおおお！  
！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

陰の裏でパチパチと光が爆ぜた♡♡♡♡♡♡

一瞬また意識を手放しそうになったけれど、足を掴まれたことに気付いて目を見開く♡

掴んでいたのは洸一だ♡♡

普段の落ち着いた彼からは想像もつかない力で足首を掴まれ、ぐずぐずに濡れたおまんこを差し出すように足を開かれた♡♡♡♡♡

「もういいんですよ、お嬢様のおまんこに私のちんぽ、挿れても…！」

「え、こういち、」

ぐぢゅ……！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡

洸一は性急にベルトを外しスーツパンツを下ろすと、私の足を掴み直しつつ腰を一気に進めてきた♡♡

普段の、私に気遣いすぎるほどの彼はどこへ行ったんだろう、焦ったような興奮したような顔をして勃起したちんぽを私のおまんこに埋めて♡♡♡♡

「お嬢様のおまんこ、……、やっと…」

顔を歪めて、そのまま腰を振り出した♡♡♡♡

ぱんっ♡♡ ぱんぱんっ♡♡♡

ぱんっ！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡

私は日頃からオナニー三昧だけれど男性経験はなかった♡♡

ディルドならいくらでも挿れたことがある、しかもそれもだんだんと大きくなってきて、きっと通常の男性のちんぽより大きいサイズの♡♡

(でも、本物のちんぽってこんな感じなんだ…♡♡♡)

私のおまんこを広げ、馴染んで、カリを膣壁に引っ掛けながら抽送し、奥へ奥へと必死に突いてきて……♡♡

♡♡♡♡

(ちんぽ♡♡♡♡ きもちいい♡♡♡♡ おまんこ満たされてく……♡♡♡♡♡ これがセックス……♡♡♡♡♡  
♡)

ぱんっ！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡

「お” ♡♡ お♡♡♡ ん、んっ♡♡♡ おんツ…♡♡♡」

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん！♡♡♡  
♡♡

「ふお” おッ♡♡ ちんぽ♡♡♡♡ いい、っ♡♡♡ お”  
ツ、お” っ♡♡♡♡♡」

早くなったピストン♡♡

気付けば私は足を掴まれているのも忘れて自ら膝を上げ  
洗一を受け入れていた♡♡♡♡

彼は真っ赤な顔をして必死に私に腰をぶつけてくる♡  
♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん！！♡♡  
♡♡♡

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん！！♡♡  
♡♡♡

「お嬢様、お嬢様…！」

「お”、おおおっ♡♡♡♡ おく、きもちいいよお♡♡  
♡ きもちいいのきてる♡♡♡♡♡ おく♡とんとんされるの♡♡いい…！♡♡♡♡♡」

夢中でちんぽを味わっていると、欲情しきった顔の岳と海翔も、

「気持ちいいこと大好きなオナニー中毒のお嬢様は♡  
おまんこだけじゃ足りないですよね♡♡」

「オナニーじゃできないことしましょうね♡♡♡」

そう言って岳は私の右胸に舌を這わせ♡♡ 海翔は頭上から私の頬を両手で包むとそのまま唇を重ねてきた♡  
♡♡

れ♡♡れろお…♡♡♡

岳はざらついた舌でねっとりと乳首を舐め上げ、  
れる、るりゅっ♡♡ ぐりゅぐりゅぐりゅ♡♡♡ れる  
……♡♡♡♡

舌を押し付けたまま乳首を舐め回し♡♡

ちゅ♡♡ ぷちゅ♡♡♡ ちゅ♡♡♡ ちゅ、う…♡♡♡  
♡♡

海翔は唇同士を密着させたまま軽く吸ったあと、  
はむ♡♡ ちゅ♡♡♡ ちゅ、ろ♡♡ちゅろ♡♡♡  
舌で私の唇をつつくとその隙間から私の口内へ舌を差し込んできた♡♡♡♡

視界が海翔でいっぱいになっている♡♡  
精一杯海翔に舌を差し出す私は必死に喉をそらせ、だ  
らりとシーツに落としていた両手は誰かの指に絡め取ら  
れた♡♡♡

そうしていると足を掴んでいた洸一の手が私の腰を掴  
み直し♡♡♡

「お嬢様、こうしてお嬢様のおまんこを気持ちよくでき  
るなんて夢のようです…！ いっぱい気持ちよくなって  
くださいね」

パンッ！！♡♡♡♡♡♡

奥をえぐるように突き込んで♡♡  
そこへちんぽの先を当てたまま♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

！！！！♡♡♡♡♡♡

細かに腰をぶつけてきた♡♡♡♡♡

「ふお、……ッ” ッ” ！！♡♡♡♡♡」

それはまるで体の奥に火をつけられるようで♡♡♡♡

私は必死に誰かの指を握りそれを受け止める♡♡♡♡

♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

！！！！♡♡♡♡♡♡

肌と肌がぶつかるのと同時に奥にぶつけられ♡♡♡

れる♡♡ ぐりゅ、ぐりゅ♡♡♡ れるれるれる…

♡♡♡ ぐりゅう、ぐりゅ、ぐりゅう…♡♡♡♡

岳の舌が乳首を押し込みこねくり回して♡♡♡

ちゅ♡♡ ちゅる♡♡♡ れろお♡♡♡♡ ちゅる♡♡ち

ゅる♡♡♡

海翔の舌が私の舌に絡まり、吸い上げながら擦り合わせてくる♡♡♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

！！！！♡♡♡♡♡♡

ぐりゅぐりゅぐりゅ♡♡♡♡♡ ぐりゅりゅ♡♡ れら

れられられられられら♡♡♡

ちゅろ♡♡ ちゅ♡♡♡ ちゅむ♡♡ ぢゅ、ろ♡♡♡  
ぢゅろお…♡♡♡♡♡

「……お♡♡♡♡♡ ふお♡♡♡ ん”っ♡♡ き、もち  
……よお♡♡♡♡♡」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン  
!!!♡♡♡♡♡  
パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン  
!!!♡♡♡♡♡

早いピストン♡♡♡♡♡  
快感が体の奥へ蓄積されていって何も考えられなくな  
る♡♡♡♡♡  
限界まで足を開き勃起しきった乳首を舌で責められ、  
舌を突き出して♡♡♡♡♡

誰かの指を握った私の手はカタカタと震え出した♡♡  
♡♡♡

「お嬢様、イきそうなんでしょう？ 俺のちんぽでいく  
ところを見せてください、お嬢様の可愛いおまんこが俺のち  
んぽ搾るところ、見せて…！」

そこで、ピストンは更に私を追い詰めるものになった

♡♡♡♡♡

規則的な、ただ私をイカせるための…♡♡♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

!!!♡♡♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

!!!♡♡♡♡♡

■続きは製品版にて♡